

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

1 ミッション(地域社会における自校の使命)

学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることを目指す

2 ビジョン(使命の追求を通じて実現しようとする自校の将来像)

- 社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーを育成する学校
- 「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校

3 重点的に育成する力

- ① 様々な場面で活用できる知識・技能の深い理解
- ② 新しい価値を生み出す創造的・批判的思考力
- ③ 異なる文化・価値観を持つ人々と協働する力
- ④ 目標に向かってやり抜く力・自信
- ⑤ 日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力

4 環境分析

①	<p>国際バカロレア教育 (IB) を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す</p> <p><b>【学校のミッション・ビジョン】</b>                  昨年度より、ミッション・ビジョンの校内掲示、全生徒・教職員の携帯や学活など、ミッション・ビジョンを用いた教育活動を行っている。一方で、それらを自分の言葉で説明したり、常にそれに基づいた価値判断をしたりする機会が不足している。今年度は、生徒・保護者・教職員研修などすべての活動においてその関連を明確にし、常にミッション・ビジョンとの関わりを明確にしながらか教育活動を進めていく必要がある。</p> <p><b>【IBを用いた指導と学習】</b>                  昨年度より、MYP・DP 候補校として MYP を実践しており、その指導と学習に関しては、IBO から委嘱された MYP コンサルタントからも一定の評価を得ている。今年度は、学習指導要領や SEE Learning、未来創造科、MYP など、カリキュラムどうしのつながりを可視化し、本校の文脈にのった本校ならではの IB を用いた学習プログラムをより発展させていく必要がある。</p> <p><b>【IBで重視されている、多言語主義について】</b>                  昨年度、英語による言語の発達については、教育課程の内外で授業、オンライン英会話、外国人教員による英語活動など様々な活動を行い、生徒の英語力の伸長を図ってきた。今年度は、シニアディレクターを中心とし英語における授業や放課後活動を再整理し、可視化することで、学校全体として英語による生徒の言語の発達に資する仕組みとカリキュラムを再構成していく必要がある。</p>
②	<p>寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める</p> <p><b>【安心安全な寮生活の確保】</b>                  昨年度、寮生活に関する生徒アンケート調査の項目のうち、「寮則を守り、自分で規律ある生活を送っている」においては、肯定的評価の割合が 67%であった。また、hyper - QU テストの項目の「みんなで決めたことには従っている」においては、肯定的評価の割合が 74.4%であった。学校・寮の生活におけるルール遵守の意識は高まりつつあるが、生徒一人一人の力を発揮させ、集団として全体が高まっていくことを更に目指していく必要がある。今年度は、寮則の意義と、きまりを遵守することについて生徒にしっかり考えさせることを通して、自律した態度と規律ある生活習慣が身に付けられるよう指導と支援の充実を図る必要がある。</p> <p><b>【異年齢による共同生活を通して、高い道徳性と人間的な魅力を持つ生徒の育成】</b>                  今年度は、異年齢での自治的な活動の充実に向けて、生徒会活動や寮生活での「フレキシブルタイム」を充実させるとともに、委員会や実行委員会での取組、ボランティア活動の充実を図り、お互いを尊重し、認め合う支持的風土の醸成を図る。また、各活動では、課題の改善やよりよい環境づくりに向けての取組を考え実行し、振り返り、改善するというサイクルを通して、生徒の主体性を育むなど、活動の活性化を図るとともに、高い道徳性に基づく実践につながるよう、行動の仕方や心の持ち方と態度の育成を図る必要がある。</p> <p><b>【食に関する生徒の意識向上と望ましい食習慣の確立】</b>                  昨年度、広島県教育委員会が実施する「学校給食における地場産物等の使用状況調査」の第 1 回調査における本校の状況は、国産の食材使用率は 55.9%、そのうち、地場産物の使用率は 11.8%であった。また、第 2 回調査における本校の状況は、国産の食材使用率 49.5%、そのうち、地場産物の使用率は 10.8%であった。今年度は、広島県が目指している地場産物の使用についての目標値が 40%以上であることや、本校の調査結果や生徒を対象に実施した食生活アンケートや生徒の声等を提示しながら、引き続き業者との交渉を粘り強く継続していき、県の目標に近づけるよう、食材ルートの拡大を進める必要がある。また、生徒が食に対する意識を高めることができ、健全な生活を実現することができるための手立てを講じていく必要がある。</p>
③	<p>各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る</p> <p><b>【子供と向き合う時間の適切な確保】</b>                  昨年度、「業務改善アンケート」において、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている教員は、71%であった。比較的高い数値ではあるが、全寮制という本校の特徴からすると、十分とは言えない。限られた時間の中で業務を効率的に進め、かつ、すべての教員が十分に子供と向き合う時間が確保されていると感じることができるよう、他二つの目標と連動して、取組を進める必要がある。</p>

<p>【一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合】</p> <p>昨年度、毎週水曜日を定時退校日と設定して、働き方を意識した仕事との向き合い方や定時に帰宅を促す声掛け等の取組を継続的に行い、時間外勤務の縮減に取り組んできたが、一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合が60%を超える月は、8月と3月の2回のみであり、月平均45時間以下の教職員の割合は、45%であった。目標として掲げた60%を大きく下回った。分掌主任等のマネジメント力の向上を図り、主任を中心とした組織的な分掌等の業務が遂行される学校体制を構築し実践していかねばならない。校務運営会議や学校衛生委員会を効果的な協議の場とすることや、それを通じて教職員の勤務時間を意識した働き方への転換を図り、教職員間での声掛けなどが日常的に行われる学校文化の醸成や働き方に係る意識の醸成を進めていく必要がある。また一方で、個々の教職員が持つ業務量の平準化など、仕事に対する意欲の向上に繋げる学校体制、仕組みづくりを進めていく必要がある。</p>
<p>【取組方針の共通理解を図る校内研修の実施】</p> <p>広島県教育委員会では、平成30年度に「学校における働き方改革取組方針」を策定し、長時間勤務の縮減に向けた取組を推進してきたが、国の法律改正や勤務時間の上限に関するガイドラインの指針への格上げなどを踏まえ、令和2年3月に目標等を再設定するとともに重点的に取り組む項目を明示した。こうした県の動向や、本校における時間外勤務の状況を考慮し、改めて本取組方針改定の趣旨を徹底し教職員の意識を高めるために、組織的な取組の充実を図る必要がある。</p>

## 5 目標の設定

学校経営目標						
達成目標	評価指標	実績	目標値			担当部
		令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	
<b>1 国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す</b>						
学校のアイデンティティを明確にし、生徒・保護者・教職員が自らの表現で、自身の行動・活動の目的を説明することができる。	年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価（生徒・保護者・教職員対象 4段階）	-	平均値 2.8	平均値 3.0	平均値 3.2	IB推進 進路指導
日本の学習指導要領とMYP, SEE Learningを融合させた指導と学習を充実させることができる。	年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価（教員対象 4段階）	-	平均値 2.8	平均値 3.0	平均値 3.2	IB推進 教務
生徒一人一人の英語力を高めることができるカリキュラムの開発と指導方法を確立し、一人一人の生徒が英語力を伸ばさせることができる。	各生徒の英語力の伸長（年度当初から1以上フェーズが上がった生徒の割合）	70%	75%	80%	85%	IB推進 教務
<b>2 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める</b>						
生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	67%	80%	85%	90%	寮務 生徒支援
生徒一人一人が、寮生活における様々な人との関わりや活動を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じている。	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	74%	80%	82%	85%	寮務 生徒支援
生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め望ましい食習慣を身に付けている。	生徒アンケート調査及び地場産物の活用状況（県の目標値）における肯定的回答の割合	-	80%	82%	85%	寮務
<b>3 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る</b>						
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	71%	75%	80%	85%	校務運営 委員 管理職
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	45%	60%	80%	100%	校務運営 委員 管理職
教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。	全体・学年・分掌における研修の実施合計回数	-	1回	2回	3回	校務運営 委員 管理職

6 行動計画

学校経営目標				
	達成目標	本年度行動計画	中期行動計画	担当部等
1 国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す				
	学校のアイデンティティを確立し、生徒・保護者・教職員が自らの表現で、自身の行動・活動の目的を説明することができる。	<b>【生徒・教職員】</b> ・学校アイデンティティ等に関する研修実施 <b>【保護者】</b> ・情報提供の充実(WS, コーディネーターニュース, 進路通信等)	<b>【生徒】</b> ・学校アイデンティティ WS 等の特別研修実施 ・学活における定期的な研修実施 <b>【教職員】</b> ・教員研修の実施(オンライン WS 等) <b>【保護者】</b> ・情報提供(WS, コーディネーターニュース, 進路通信等の定期発行)	IB 推進 進路指導
	日本の学習指導要領とMYP, SEE Learningを融合させた指導と学習を充実させることができる。	・教員が実践を共有することができるコミュニケーションチャンネル(共有フォルダ)を構築し、教員の主体的な学びを促す。 ・教員研修を実施する。	・コミュニケーションチャンネルの構築 ・教員研修の実施(授業改善, SEE Learning)	IB 推進 教務
	生徒一人一人の英語力を高めることができるカリキュラムの開発と指導方法を確立し、一人一人の生徒が英語力を伸ばさせることができる。	・放課後英語活動のカリキュラムの充実によりアカデミックな英語力の向上を図る。 ・授業観察において、授業観察シートに英語による言語の発達の項目を加え、授業観察を実施するとともに、互いにフィードバックを行う。 ・教員研修を実施する。	・ベーシックリテラシークラス(G7/8)のカリキュラム開発 ・改善した授業観察シートを用いた授業観察とフィードバックの実施 ・教員研修の実施(英語による言語の発達)	IB 推進 教務
2 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める				
	生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を送っている。	自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。	・年度当初のオリエンテーションを充実させ、規律を徹底指導する。 ・定期的にユニットリーダー等のミーティングを行い、生活の振り返りや改善に向けた取組を行う。	寮務 生徒支援
	生徒一人一人が、寮生活における様々な人との関わりや活動を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じている。	異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションを大切に、生徒が安心して楽しく寮生活を送るための環境づくりとサポート体制を充実させる。	・異年齢集団での活動や行事の計画等を通して、寮の自治的な活動を推進する。 ・hyper-QUや各種アンケートの結果を活用し、集団と個の実態把握及び支援を行う。	寮務 生徒支援
	生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め望ましい食習慣を身に付けている。	日々の食事指導を通して、食事のマナーや栄養などの食生活に関する正しい知識を習得し、自身の健康と体の管理ができるようにする。	・地場産物を使ったメニューを定期的に提供するなど、献立を工夫する。	寮務
3 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る				
	教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。	・子供と向き合う時間を確保するために有効な手立てを集約・共有した後に実践・検証し、システム化する。	校務運営 委員 管理職
	教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を削減している。	本校における適切な入退校時刻の設定について校務運営会議で検討し、各分掌や学年で周知したのち、全体で取り組む。	・設定した入退校時刻を意識した業務改善により、効率化された内容や有効な手立てを集約・共有し、改善を図る。	校務運営 委員 管理職
	教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。	働き方改革取組方針について、全体研修等で再度理解を深め、業務の進め方等について、学年・分掌においてそれぞれの研修の機会を設定し、協議する。	・全体、学年、分掌のそれぞれにおいて、取組を進める視点を明確にし、上記二つの目標の達成に寄与する研修内容を工夫する。	校務運営 委員 管理職